

探究する扇小

～自主学習ノート～

五年生の探究です。この子はずっと、このように小説を書いています。自分で考えたのか、視写しているのか。力がつく探求です。

$\xrightarrow{\text{偏僻}} \rightarrow$ 偏僻方族

第2章 正体

「あれ? お姉ちゃん? 顔色悪いよ?」何気ない音頭でこちらを見つめ、未だ顔色が悪いのかんで当然だ。いつ返してくるのだろうかとあれほど思っていたのに、いざ合うと震えが止まらない。取り戻す。今日はとまつてもらうことにした。「あ、大丈夫だよ。心配させてごめん。」「大丈夫大丈夫! こっちこそ勝手に上り。チャップアーメーん」とにがく、今日は喜びに浸ることにした。その方がいい。やっと解放されう。その瞬間、妹との思い出と裏で泣いていたことが頭の中をかけめぐる。それからお風呂に入れたり一緒にハブラシをしたりした。まろでゆのじ真のようだ。たぶん、今からここに住んでいい? 一瞬戸きど、たが、別に掛ける理由もないのにOKにした。「や、なー

「これでまた一緒に住めるんだね
！女の顔みたいに！」その一言が
心にささった。午前1時。私はこ
うふんとねづけながらた。ふとと
だりを見ると、妹がいない。本わ
ててリビングに向かうた。テのと
ちゅううアベランダに目をやると妹
が立っていた。「うーん、コイツ、
やけにしぶといな妹の声ではなか
つた。私はテの声に聞き覚えがあ
つた。家族が死んだぬ直前に聞こ
えた声だ。幸いにも私は事故によ
りながったが、その声だけは確かに
聞いた。「ん？」どうやらこちら
に気づいたようだ。こちらを向
いた妹の顔は目は血走り、がって
て妹の声とはかけはなれたす
がただ、た。第二話 正体 終

高橋真子
クリーニング店
そのの、よく氣
偽家旗